RIVER FUND

河川基金だより

川を愛する人のために

河川基金

2016 October

Vol. 35

INTERVIEW

川づくりの現場から

広瀬川が繋ぐ、人・環境・教育・未来

カワラバン（宮城県）　代表　菅原 正徳 さま

河川教育による子供たちの変容

多摩市立連光寺小学校（東京都）　教諭　松田 一枝さま　教育連携コーディネーター　羽澄 ゆり子さま

河川財団奨励賞受賞研究

- イタセンパラを郷土の宝として次世代へ -

富山県氷見市教育委員会　主任学芸員　西尾 正輝 さま

「株式会社あらた」様が、河川財団と連携したキャンペーンを実施！

水難事故防止
「ライジャケ・オン・キャンペーン」

ライジャケ・オン!

公益財団法人
河川財団

河川基金　FILE 03

河川防災の
小学校出前授業・
子供向けイベント

特定非営利活動法人
気象キャスターネットワーク
（東京都台東区）

近年、子供達が河川と親しむことのできる場が少なくなり、河川の性質や危険を体感して学ぶ機会が減っている一方で、ゲリラ豪雨や内地氾濫など、かつてなかった災害も増加しています。
そこで、気象キャスターネットワークでは、子供達が気象・河川災害について必要な知識を正しく理解し、自ら危険を察知し災害から身を守る力を身につけることを目的に、気象キャスター・気象予報士による小学校出前授業と子供向けイベントを実施しています。

河川基金は、川づくり団体「気象キャスターネットワーク」を応援しています。

【写真】親子で学ぶお天気防災教室「サイぼう君のお天気ぼうさい探検隊」

河川基金へのご寄附は
全国の川をより良くする活動へと
つながっています。

河川
基金

TOPICS

04 平成 29 年度河川基金助成の募集を開始します

06 河川を取り巻く課題に挑む研究者達
- 平成 28 年度　河川基金研究成果発表会 -

07 「平成 28 年度 川づくり団体全国事例発表会」及び「平成 28 年度 河川教育研究交流会」のお知らせ

INTERVIEW

川づくりの現場から

Good Practices of the Outcomes Supported by the River Fund

河川基金だよりでは、様々な川づくり活動に取り組む皆さまにとって、その活動の参考となるような Good Practice についての情報発信と共有を目指していきます。

今回は、河川基金を活用して全国各地で活動されている方々のなかで、川づくり団体については菅原 正徳さま、学校での河川教育については松田 一枝さまと羽澄 ゆり子さま、河川に関する研究については西尾 正輝さまから、その活動の様子やメッセージをお聴きしました。

08 広瀬川が繋ぐ、人・環境・教育・未来

カワラバン（宮城県）　代表　菅原 正徳 さま

11 河川教育による子供たちの変容

多摩市立連光寺小学校（東京都）　教諭　松田一枝 さま　教育連携コーディネーター 羽澄 ゆり子さま

14 河川財団奨励賞受賞研究
- イタセンパラを郷土の宝として次世代へ -

富山県氷見市教育委員会　主任学芸員　西尾 正輝 さま

INFO

17 紹介 「株式会社あらた」様が、河川財団と連携したキャンペーンを実施！

18 紹介 水難事故防止「ライジャケ・オン・キャンペーン」（全国一斉川の流れ体験）

19 御礼 ご寄附の御礼

19 紹介 河川基金ウェブサイトをリニューアルしました

[表紙写真]
ライジャケ・オン・キャンペーン
川の流れ体験イベント in 多摩川

[発行]
公益財団法人 河川財団
〒 103-0001
東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9
住友生命日本橋小伝馬町ビル 2 階

[編集・デザイン]
公益財団法人 河川財団 基金事業部

TOPICS

平成 29 年度河川基金助成の募集を開始します

河川財団では、昭和 63 年に河川基金（旧名称・河川整備基金）が創設されてから、28 年にわたり助成事業を進めてまいりました。これまでに河川にかかる調査・研究、啓発活動、河川教育等に対して助成を行い、多くの研究者や研究機関、市民団体、学校等の活動を支援してきました。

このたび、平成 29 年度の河川基金助成の募集を開始いたしますのでその概要をご案内いたします。河川基金助成が多くの方々に活用され、人々の河川への理解が深まり、人と川との良好な関係がさらに強いものとなることを願い、皆様からの積極的なご応募をお待ちしております。

❶ 研究者・研究機関部門

防災・減災や河川・流域の視点から、治水・利水・環境に関する新たな科学的知見を得る取り組みや新技術の開発に向けた調査・研究を行う、研究者や研究機関に助成を行います。

❷ 川づくり団体部門

河川や流域への理解を深めることにより、川や流域をより健全な姿に変える、あるいは戻すための活動を行う市民団体等（川づくり団体）に助成を行っています。

❸ 学校部門

学校教育の現場において、河川・流域を通じて防災、環境、歴史・文化等を学習する河川教育に取り組む小・中・高等学校、特別支援学校、幼稚園、保育所、認定こども園等に助成を行っています。

募集期間

平成 28 年 10 月 1 日（土）～ 11 月 30 日（水）18 時まで

募集期間

インターネットによるオンラインで申請してください。
※詳細については河川財団ホームページ（www.kasen.or.jp）にてお知らせいたします。

審査方法

採否は有識者により構成される選考委員会での審査に基づき決定いたします。採否の通知は全ての申請者に対して 4 月初旬に行います。

平成 29 年度 河川基金　助成一覧

助成部門	助成対象者	助成区分	期間	助成金額
❶ 研究者・研究機関部門	研究機関	一般的助成	1 ～ 2 年	200 万円（上限）
		緊急災害調査	1 年	300 万円（上限）
		学術図書出版助成	1 年	100 万円（上限）
		アウトリーチ活動 A	1 年	200 万円（上限）
	一般研究者	一般的助成	1 ～ 2 年	100 万円（定額）
		学術図書出版助成	1 年	100 万円（上限）
		アウトリーチ活動 B	1 年	100 万円（定額）
		アウトリーチ活動 C	1 年	50 万円（定額）
	若手研究者	一般的助成	1 ～ 2 年	60 万円（定額）
	ジュニア研究者	一般的助成（高等学校）	1 年	50 万円（定額）
		一般的助成（中学校）	1 年	30 万円（定額）
❷ 川づくり団体部門	流域川づくり団体	活動 A	1 年	100 万円（定額）
		活動 B	1 年	60 万円（定額）
		活動 C	1 年	30 万円（定額）
	全国川づくり団体	活動 A	1 年	500 万円（上限）
		活動 B	1 年	100 万円（定額）
	新設川づくり団体	新設川づくり団体自立支援助成	1 ～ 5 年	毎年 50 万円（定額）
❸ 学校部門	幼稚園、保育所、認定こども園等	幼稚園、保育所、認定こども園等	1 年	10 万円（定額）
	小、中、高等学校、特別支援学校等	スタートアップ（単学年での取り組みが対象）	1 年	10 万円（定額）
		アドバンス（複数学年での取り組みが対象）	1 年	30 万円（定額）
		河川教育に関する実践的研究（全校体制での取り組みが対象）	1 年	50 万円（定額）

お知らせ

- 平成 29 年度募集より、研究者・研究機関部門の「アウトリーチ活動助成」の内容が明確化されました。募集要項をよくご覧になり、助成区分を選択してください。
- 研究者・研究機関部門の「一般研究者」への「一般的助成」では、申請することができる方（共同研究者も含む）の年齢が、満 60 歳未満（平成 29 年 3 月 31 日時点）となりましたので、ご留意ください。

TOPICS

河川を取り巻く課題に挑む研究者達

- 平成 28 年度　河川基金研究成果発表会 -

平成 28 年 7 月 28 日、東京大学伊藤国際学術センターにて平成 28 年度河川基金研究成果発表会が開催されました。本発表会では、平成 27 年度に河川基金による助成を受けたすべての研究者・研究機関の皆様に研究成果の発表をしていただいており、今回は１１０名の方々による口頭発表とポスターセッションが行われました。

今回は、河川基金助成による研究成果をもとに、卓越した功績を挙げた助成研究者を表彰する河川財団賞受賞者（２名）による記念講演も行われました。

平成27年度の受賞者である埼玉大学大学院の浅枝隆教授には『水草にとっての棲み易さ、棲み難さを測る～水草分布を決める要因を探る～』と題して、植物自身が感じるストレス要因を分析し、植物にとって好ましい環境を評価する方法を開発され、それを生育地や分布の把握・管理に適用していく研究についてのお話をいただきました。

同じく受賞者である群馬大学大学院の清水義彦教授には、『砂州・低水路と植生の管理に関する水理研究について』と題して、植生化の進む砂州の固定化による治水上の課題、その管理に向けた砂州と植生の水理研究のあり方、そして固定砂州の掘削による中小洪水営力を用いた樹林化抑制と水衝部対策の河道管理についてお話をいただきました。

発表会の最後には平成27年度の河川財団賞（２名）および若手研究者を対象とする河川財団奨励賞（２名）の表彰、今回発表された平成27年度完了の河川基金助成研究のうち優秀な成果を表彰する優秀成果賞（６名）と、当日のプレゼンテーションについて聴講者による投票で選ばれた優秀発表者賞（１名）の表彰が行われました。

今回は総勢２３４名の皆様に参加を頂き、大盛況のうちに終了いたしました。多くの皆様のご来場、誠にありがとうございました。

ポスターセッションの様子

受賞者一覧　（順不同、敬称略）

所属機関名	代表者	助成事業名
河川財団賞　（河川基金助成による研究成果をもとに、卓越した功績を上げた助成研究者を表彰するもの。）		
埼玉大学大学院	浅枝　隆	沈水植物群落再生を目的として、流速場が沈水植物の生理特性に与える影響の把握と構造物を用いた流動制御、群落再生の指針の作成
群馬大学大学院	清水　義彦	植生化が進む砂州河道の地形と植生の管理手法に関する水理研究
河川財団奨励賞　（今後の活躍が期待される、河川基金助成を受けた優秀な若手研究者を表彰するもの）		
岡山大学	齋藤　光代	河口干潟での海苔養殖に及ぼす河川経由栄養塩供給の長期的影響評価－洪水流出・河川水伏没・ダム建設の影響に着目して－
氷見市教育委員会	西尾　正輝	万尾川水系に生息するイタセンパラの基礎的研究
優秀成果賞　（平成 27 年度に完了した河川基金助成研究のうち、優秀な成果を表彰するもの。）		
埼玉大学大学院	浅枝　隆	樹林化モデル開発のための洪水と樹木の侵入比高の関係及び生長過程での枯死率の定量化
京都大学大学院	大手　信人	福島原発事故で沈着した放射性セシウムの森林から河川への流出に及ぼす懸濁態・溶存態有機物の機能に関する調査研究
東京大学大学院	佐藤　愼司	天竜川 - 遠洲難流砂系の土砂動態解明に基づく新たな環境・防災基盤の構築に関する研究
東北大学大学院	田中　仁	東日本大震災津波後の河口流出土砂を含む広域沿岸土砂収支の変容
京都大学大学院	田中　宏明	淀川水系中流域における病原微生物と指標微生物の動態の比較
芝浦工業大学	宮本　仁志	実態・要因の体系的把握に基づく樹林化現象の確率診断モデルの開発と河道内樹木の水系一貫管理技術の提案
土木研究所 自然共生研究センター	末吉　正尚	雪堆積場からの融雪水が河川生態系に与える影響及び環境配慮型管理の効果検証
市川学園 市川高等学校	宮﨑　章	高校化学部による落ち葉を使った水質浄化に関する研究
優秀発表者賞　（研究成果発表会において、当日の聴講者による投票で選ばれた優秀な発表者を表彰するもの。）		
大阪市立新北島中学校	宮原　未来	大和川河口付近の水質調査研究～持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）の視点に立って～

お知らせ

平成 28 年度　川づくり団体全国事例発表会

河川財団では、河川基金の助成を受けて市民団体や学校等が実施している河川に関わる活動の事例発表会を毎年開催しております。今回の発表会では、平成２７年度助成事業の中から、今後参考となる優秀な取り組みについて発表・紹介を行い、川づくりに取り組む皆様への情報発信や共有を目指します。

平成 28 年度　川づくり団体全国事例発表会

日時：　平成 29 年２月３日（金）13:00 開始予定
会場：　東京大学　山上会館
定員：　100 名（参加費無料）
参加対象：　全国各地で水辺での体験活動を実施している市民団体、教育関係者、河川管理者、都道府県等の行政関係者

お知らせ

平成 28 年度　河川教育研究交流会

河川財団では、学校部門での河川基金助成の成果を発表する研究交流会を開催しています。学校の教育現場で積み重ねられてきた河川教育の経験や知識を、教育関係者、市民団体、河川管理者などの間で幅広く共有し、学校での河川教育の促進を目指します。

平成 28 年度　河川教育研究交流会

日時：　平成 29 年２月４日（土）9:30 開始予定
会場：　東京大学　山上会館
定員：　100 名（参加費無料）
参加対象：　河川教育に関心のある小・中・高等学校の先生、市民団体、行政関係者等の方々

INTERVIEW

川づくりの現場から

広瀬川が繋ぐ、人・環境・教育・未来

カワラバン（宮城県）　代表　菅原 正徳 さま

第二の故郷仙台で、河川を主体とした環境教育を実践

高校を卒業するまで実家で過ごした18年間よりも、仙台での生活の方が長くなりました。宮城県北部の農家に生まれ、小学生のころから季節毎の農作業を手伝ってきたので、自然は身近というよりも生活の一部として成長しました。

そして、何よりも家のすぐ目の前を流れる川での「釣り」が、私の原体験であり、母からは、「3才の時には釣竿を持っていた」と言われました。

このような背景もあり、建築関係を学んでいた学生時代から環境に携わる仕事に就きたいと考え２００２年に大学を卒業しました。当時は今ほど企業のＣＳＲが活発ではなく、また情報も限られていたので、すぐに仕事を見つけることはできませんでした。

しかし運良く、環境活動を実践している「ＮＰＯ法人水・環境ネット東北」と巡り会い、そこで親子向け自然体験などのボランティアスタッフとして関わり、一年後には職員となり２０１０年までの８年間、環境教育や自然体験、市民向けワークショップの企画運営等に従事しました。この「ＮＰＯ法人水・環境ネット東北」に在籍した期間に生まれた教育関係者や多くの市民団体、企業等の人々とのつながりが現在の活動の礎となっています。

独立する前年には延べで年間２０００名を超える児童等に対して、川での環境学習を提供するまでになりました。そして、２０１１年1月に「ＮＰＯ法人水・環境ネット東北」からその分野を引き継ぐ形で「カワラバン」を立ち上げました。

その直後の3月11日の東日本大震災があり、「もう誰も川に行かなくなるのでは」と心配した日々もありましたが、それまでに培った実績と人脈を活かし何とか現在まで活動を続けてきています。

広瀬川が繋ぐ様々な試み

現在の活動の中心となっているのが、幼稚園や学校などで行わ

広瀬川が繋ぐ、人・環境・教育・未来

「カワラバン」における取り組み（地元仙台で川を活かした環境教育・体験活動を実践）

仙台を中心として活動する「カワラバン」の菅原正徳さんは、仙台市内を流れる広瀬川や七北田川などをフィールドとして環境教育や様々な体験活動を長年にわたり実践しています。特に、仙台市内の幼稚園や小学校等を中心として学校教育現場と連携し、学校に出向く出前授業とともに、子どもたちを実際に川に誘い体験を通した活動については、毎年数多くの実績を残しています。

活動の内容は、当財団が推進する取組みの一つとなっている「学校教育現場の授業の中に『河川教育』を導入」する先進的な事例ともなるものです。さらに「ＮＰＯ法人川に学ぶ体験活動協議会」が取り組んでいる学校現場と連携・協働して川を活かし体験を通した河川教育を普及・展開する「学校連携コーディネーター」養成事業の模範的な実践事例として教育関係者からも高く評価されています。

れている環境学習の支援です。

仙台市では教育機関が外部講師を招いて環境学習をする際に経費を支援する制度があります。市では環境団体等が指導・実践できる様々なプログラムを冊子化して各学校に配布します。学校はこの中から理科などの教科学習や総合的な学習の時間のテーマに合ったものを抽出・選定し、市の担当窓口に実施依頼の申込みをします。

カワラバンでは、川の環境を学ぶプログラムや川の体験プログラム、水防災等のプログラムなどを毎年度掲載してもらっています。

他に例のない非常に優れた制度となっていますが、学校からの申込みが増加傾向にあり、予算上から全ての学校のリクエストに応えられなくなってきていることや、この制度自体がいつまでも続くとは限らないので、その際の財源をどうするかを心配しています。

昨年の出前講座、川での体験活動の支援実績は、66回実施し延べ３５００人以上の児童等を対象としました。土日祝祭日に行った市民センター等での講座や主催事業の参加者を含めるともっと人数は多くなります。

また、地元企業や団体等１２５社加入している「広瀬川１万人プロジェクト実行委員会」の事務局を担い事務局長として運営を行っています。年２回（春・秋）広瀬川流域13会場（春は５会場）のゴミ拾いを主な活動としています。

仙台市のシンボル・広瀬川というイメージが先行し、大勢の市民に親しまれている印象ですが、実際には川に足を運ぶ人は少ないという現状があり、川に目を向け関心を持ってもらうために川へ誘い実際に触れるツールとしての清掃活動となっています。清掃活動への参加をきっかけに広瀬川の魅力を発見しさらに親しんでもらえればとの思いで運営を行なっています。

このプロジェクトが始まったばかりの頃は、秋のみの開催で参加者も３００名程度でしたが、現在では春と秋を合わせると２５００名を超える規模になりました。今後の目標は清掃会場を増やして１万人規模の市民が参加する流域一斉清掃を目標としています。

そのためには、各会場のとりまとめをする担い手を育成することが課題となっており、流域内の町内会や学校、大学、企業との連携をさらに強める取り組みについて常日頃から考えて活動しています。

さらに、日頃から培ってきた学校等とのつながりも生かして徐々に増やしていきたいと考えています。

広瀬川への疑問からはじまった助成事業

活動を継続していくために河川財団の基金も含めいくつか助成をいただいており、河川基金では魚類に電波発信機をつけた市民参加型追跡調査を行なっています。

関東などの河川では冬でもオイカワ等の釣りが行われているようですが、広瀬川では12月を過ぎると川から生き物がほとんど居なくなります。定説では、冬場は深い淵のそこでじっとして

広瀬川が繋ぐ、人・環境・教育・未来

いると言われているので、めぼしいポイントを水中カメラで撮影してみましたが、魚の気配は感じることはできませんでした。

このことから、魚などは湧水などで水温が安定したポイントで様々な魚が越冬していると考えましたが、中規模河川である広瀬川ではそのようなポイントが数多くあるとは思えません。

また、近年は温暖化等の影響で渇水と豪雨のリスクが高まってきています。これからは洪水で越冬や越夏をする環境が消失したり、また洪水被害が増えれば河川改修等で重要な環境が失われたりすることが懸念されています。

そこで河川を魚類がどのように移動・利用しているかを明らかにすることで、河川行政等に対して保全に向けた提言をすることを目指して、この市民参加型追跡調査の取組みをはじめました。

具体的には、魚類が年間を通じて広瀬川をどのように移動・利用しているかを調べるため、釣り上げた魚に電波発信機を付けて入れて再放流し、アンテナを持ってその電波を受信し生息場所を確認するという調査です。発信機が大きいほど発信する電波も大きくて受信しやすく電池の寿命も長くなりますが、今回は1．5センチくらいのものを使っています。

この発信機を付ける事が可能な大きさの魚は限られていて、鯉や鱒が先ず考えられますが、鱒は産卵後に死んでしまいますし、鯉だと活動範囲が狭く限られてしまいます。

広瀬川を広範囲に移動するデータが欲しかったことから、今回はニゴイを選び、発信機も高額なので、今年は3匹で行っています。

春先に広瀬川でヤマメ釣りをしていると外道としてニゴイが釣れることが多いので、採捕も楽だろうと考えていたのですが、機器の発注の関係で7月からの採捕となってしまいました。この間に産卵を終えたニゴイは春先のように活性が高くなかったので、採捕にはとても苦労しました。協力していただいた市民団体等の皆さんには大変感謝しています。

しかし、3尾目に発信器を取付け、さあ、追跡開始と言う時に、台風7号そして13号まで連続して通過していったので、ニゴイ達は大丈夫かどうか、とても心配しております。

やっぱり川が好きなんです

これまでの活動を通してモチベーションを保っているのは、新しいことを積極的に取り入れ、今まで事業化していないものに挑戦し、日々新しい仕事作りをしているという実感です。

また、環境教育は人材育成だと考えているので、地域の河川等の環境を学んだ子どもたちが、いつか仕事をするようになった際に環境に配慮したり、地域づくりに繋がる仕事をしたりなど、そんな風に繋がってもらえればいいかなと思っています。

あと、一番のモチベーションはやっぱり大好きな川に行けることですね。

菅原 正徳　Masanori SUGAWARA

カワラバン　代表

NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）トレーナー、同 学校連携コーディネーター、プロジェクト WET エデュケーター、東北工業大学客員研究員

1979 年、宮城県栗原市生まれ。
2002 年、東北工業大学建築学科卒業。
2003 年、特定非営利活動法人「水環境ネット東北」に入社、2010 年に退職。
2011 年、「カワラバン」を設立し現在に至る。

INTERVIEW

川づくりの現場から

河川教育による子供たちの変容

多摩市立連光寺小学校（東京都）
教諭　松田 一枝さま　　教育連携コーディネーター　羽澄 ゆり子さま

河川教育の取り組みを始めたきっかけ

（松田） 河川教育には、本校では平成12年度から4年生の総合的な学習の時間で取り組んできました。4年社会科の「水のゆくえ」という単元では、自分たちの飲む水はどのようにしてとどけられるのか学習しますが、この内容が多摩川についての学習につながり、発展していきました。多くの学びを与えてくれる川はたいへん魅力のある学習材です。子供たちも生き生きと学び成長していくことができ、この学習活動の価値を感じています。

（羽澄） 私は平成14年から、多摩市の教育活動指導職員として、この学習に関わりはじめました。もともと野生動物調査が専門で、水辺や河川環境関係の専門家との人脈もあり、いろいろな方を巻き込んで授業をやってみたら、ますますおもしろい形になり、現在にいたっています。

河川教育の取り組み内容（クロスカリキュラム、単一学年から複数学年への広がり）

（松田） 現在は「川は自然の宝箱」と題して総合的な学習の時間を中心に取り組んでいますが、社会科や理科の単元とも関連づけています。また自分が調べたことを書いたり、表現したりというのは、基礎的な国語力の充実にも繋がっており、クロスカリキュラム的に実施しています。また、今までは4年生単独の活動でしたが、昨年度から5年生とのつながりも考えて取り組んでいます。5年生では、「連光寺ＳＡＴＯＹＡＭＡプロジェクト」と題した学習を展開していますが、4年生の多摩川の学習をもとに水源林としての地域の森林（里山）に着目し、5年生の学習をスタートさせています

（羽澄） 4年生の川の学習の内容は、まず1学期はガサガサや野鳥観察、Ｅボート体験など川での共通体験活動を行い、川と出合います。初めて多摩川の水に入った時は、「汚い」とか「ぬるぬるしているから嫌だ」という子供がいたりするのですが、何回かの体験活動の中で多摩川には魚や植物、野鳥や昆虫が種類も数も多くいることや、中には絶滅危惧種や外来種もいたりすることを知って、いろいろな興味や疑問がわいてきます。2学期

河川教育による子供たちの変容

多摩市立連光寺小学校における取り組み

平成 12 年度より 4 年生の総合的な学習の時間を中心に、身近な学習素材である多摩川を活用した河川教育を展開。体験活動から多摩川を体感するとともに、各生徒が課題を設定し探求する学習を実践。平成 27 年度からは、5 年生でも河川教育の取り組みをスタート。

自分たちが大人になった時に多摩川がどのような姿であって欲しいかを考え、何ができるのか話し合う「多摩川未来会議」を開催するなど、体験活動や探究活動を通し自然との共生について自ら考え行動できるようになることを目指しています。

には、その興味や疑問の中から各自課題を決めて実際に川で調査をしたり、本やインターネットで調べる探究活動を行い、その成果をまとめて作品を作り、発表します。

（松田） 以前は、学習を通して多摩川の自然の豊かさや価値を実感して終わっていましたが、最近は、これからの多摩川のために自分たちはどのようにかかわっていけばよいのかを考えるような取り組みがされています。昨年は2学期のまとめの発表で、現在の多摩川の自然の豊かさや価値について考えました。そして3学期には、40年前の多摩川が死の川と呼ばれている時代の映像を見て、多摩川の過去を学びました。そのうえで、40年後自分たちが大人になった時にはどうなってほしいか考え、そのために何ができるのか話し合う「多摩川未来会議」を開催しました。会議に向けて、魚が棲みやすい川とはどんなものかを調べたり、多摩川で現在ボランティア活動をしている人たちの取り組みを調べたりして、自分の考えをまとめ、「多摩川未来会議」では、それぞれの考えを伝え合いながら、自分たちにできることを決めました。多摩川を汚さないためのポスターをつくることやごみ拾いなどの清掃活動をすることが提案され実行しました。おもしろいのは、自分たちで体験して調べて議論すると、ポスターも単に「ポイ捨てやめよう」とかではなく、多摩川にはこんな絶滅危惧種がいるから汚さないでほしいという訴えがあったりして、一味違うものになります。また、こうやって決めたごみ拾いに、子供たちは実に楽しそうに生き生きと取り組みます。地域のボランティア活動に参加しようとする子供も現れ、私たちも驚きました。

（羽澄） 子供たちが連光寺小学校に入学してから卒業するまでの間に、発達段階に応じた地域での活動を何回も何回も繰り返して経験させていきます。そして、地域の自然やそこで活動する人たちとの発見や出会いが積み重なり、子供たちの原風景として多摩川が心に刻まれてくれるといいなと思っています。

河川教育による子供たちの変容

（松田） 子供たちから出てくる言葉が具体的で豊富になります。一番わかりやすい事例は、ウエッビングマップです。子供が川から連想することを川の学習をする前に書いたものは、数も少なく、内容も単に机上の勉強で得た知識を書き出していたのが、自分が調べたことや経験したことをたくさん挙げるように変わっていきます。カワラサイコ、オイカワなど普通の大人も知らないような川にいる動植物の名前が当たり前のように出てきます。

（羽澄） やはり、ウエッビングマップの変化は大きいですね。言葉の数が増えて、具体的になります。水が冷たい、ぬるい、濁っている、流れが速い、遅い等々、現場に行った子供にしか書けない内容がたくさん見られるようになります。これは、それまで漠然と川を眺めていたものが、自分自身の目でみて、触って体験をしたことで見えるものが変化したことの表れだと思います。

また、語彙の数が増えるだけでなく、それぞれの項目につながりがあることが見えてくる子供も出てきます。たとえば「カワセミ」と「魚」を線で結ぶようになります。餌となる魚がいないとカワセミはここにはいられな

河川教育による子供たちの変容

いからです。川底の石の下に隠れる魚や水生昆虫も石と線で結ばれます。自然の中での生き物どうしのつながりに気付くのです。こうして1年後のウエッビングマップはたくさんの線で結ばれ文字通り網の目になっていきます。

外部の専門家との連携

（羽澄） 子供たちの様々な興味や関心に対応するには、学校の教員だけでは難しい面があります。最近は教員自身の自然体験活動の経験が少ないことも多いです。そこで、本校では外部の専門家の方たちと連携して対応しています。水辺の楽校のスタッフや、大学の研究者、地域の野鳥愛好家、行政の担当者、地域の博物館の学芸員、企業の河川・水環境の専門家の方など、様々な川の達人にご協力を頂いています。

ただ、外部の専門家の方は、必ずしも学校教育や子供について良く分かっているわけではありません。話がむずかしかったり、しゃべりすぎてしまったりします。また、逆に地域の方や専門家が伝えたい想いが授業の枠組みの中では伝えられないこともあります。そこで私のほうで、双方の想いが子供たちに伝えられるように専門家と学校のコーディネートを行い、プログラムをよりよいものにしていきます。

先生の異動への対応

（羽澄） 公立の学校の場合には先生の異動があります。本校で河川教育の経験を積まれた先生が異動するとたしかに校内での継続性が課題になります。そこのところは地域の支援者や私がコーディネーターとして動いて、授業を継続できるようサポートしています。一方で本校から異動した先生から異動先の学校でも河川教育の活動をやりたいという相談があったり、異動先の学校で連光寺小学校の川での活動を紹介してくれたりするなど、先生方が異動することで、今度は新しい場所に種をまいて下さるというメリットもあり、必ずしも異動は悪いことではないと感じています。

河川教育に取り組む学校へのアドバイスや提案

（羽澄） まずは先生自身が面白いと思うことが一番のポイントではないでしょうか。川にはいろいろな切り口のテーマがあり、自分なりの関心事や手法が見つかると本当に楽しくなってくると思います。

（松田） 教員の意欲は、子供たちの生き生きとした姿に引き出されます。子供たちが楽しそうに学び、力を伸ばしていくことは、大きな喜びでもあります。川の学習では、子供たちの変容が大きく、皆が生き生きと活動している姿にたくさん出会うことができます。子供たちがワークシートに川の活動の振り返りを書く時、文章を書くのが苦手な子たちでも、発見したことや疑問に思ったことをたくさん書いてくれます。是非、先生自身も楽しみながら、河川教育に取り組んでみてはいかがでしょうか。

（写真左）
松田一枝　Kazue MATSUDA

多摩市立連光寺小学校　教諭

2004年より連光寺小学校に勤務し、地域の特色を生かした学習活動の研究に関わってきた。昨年度は4年生の担任となり、多摩川の自然を生かした学習活動をＥＳＤの視点から行った。本年度は5年生の担任となり、多摩川と森林の学習をつなげる試みを行っている。

（写真右）
羽澄ゆり子　Yuriko HAZUMI

多摩市立連光寺小学校
教育連携コーディネーター

大学修了後（株）野生動物保護管理事務所研究員勤務をへて、2002年より連光寺小学校に教育活動指導職員として勤務し学習支援に携わってきた。現在は教育連携コーディネーターとして河川、森林環境教育の支援を行っている。理科講師兼務。専門分野は野生動物保護管理、環境教育、野外体験活動。

INTERVIEW

川づくりの現場から

平成 27 年度
河川財団奨励賞
受賞

河川財団奨励賞受賞研究
- イタセンパラを郷土の宝として次世代へ -

富山県氷見市教育委員会　主任学芸員　西尾　正輝 さま

平成 27 年度の「河川財団奨励賞」を受賞した富山県氷見市教育委員会の主任学芸員である西尾正輝さんに、今回の受賞対象となった研究の概要や成果、河川基金への期待、同年代の若手研究者へのメッセージ、今後の様々な活動への抱負などをお聞きしました。（河川財団奨励賞は、河川基金助成を受けた研究者のうち、今後の活躍が期待される優秀な若手研究者を表彰するものです。）

国指定天然記念物（文化庁）・国内希少野生動植物種（環境省）に登録されている『イタセンパラ』

淡水魚の研究から天然記念物保護へ

大学では淡水魚の研究をしましたが、卒業後は大学で得た知識を活かそうと富山県氷見市に赴任し、13年間に渡って天然記念物保護を担当しています。

市町村の教育委員会には、文化財の保存・活用に関わる業務を行う専門職員として「学芸員」という職種があります。私は、氷見市教育委員会の学芸員として、国指定天然記念物（文化庁）・国内希少野生動植物種（環境省）に登録されている『イタセンパラ』（写真）の保護に力を入れています。現在、天然記念物であるイタセンパラの安定的な生息が確認される場所は氷見市の万尾川に限られています。イタセンパラを生態系の重要な構成要素としてだけでなく、人間の活動によって生み出された歴史的、文化的価値の高いものとして、恒久的に本種を次世代へ引き継ぐための方策の提言や、健全に種を保存する保護池の管理・運用の取り組みなどを行っています。

「治水」「利水」「環境」の3つの概念を合わせて

河川基金に申請したのは、市役所の建設課で打合せをしている時に、基金の募集ポスターを何気なく目にしたのがきっかけでした。建設課といえば、治水や利水の分野を担当していますが、河川法には「環境」という項目があります。これは、イタセンパラを「環境」として見た場合に、イタセンパラが生息する河川である万尾川の利用形態が、治水（防火用水）・利水（農業用水）であることから、この3つの概念を合わせた研究ができるのでは？と思い申請しました。それまで助成金を得たことがなかったのですが、河川基金に若手研究者への助成枠が新設され、35歳の上限年齢に対して、私の初年度の申請年齢が32歳だったということもギリギリ3年計画に入るタイミングと上手く合致したといえます。

私は、3年間続けて研究部門で助成をいただきましたが、河川基金は、研究だけでなく子どもと川を繋げる活動に力を入れ

河川財団奨励賞受賞研究

- イタセンパラを郷土の宝として次世代へ -

ている点が素晴らしいと思います。

私も普及啓発の一環として、小学校や親子で河川に入って魚を捕まえる体験学習をしています。残念なことに、小学生の保護者や学校の先生は、川での遊び方や魚の捕り方を知らないのが現状です。「川は危ないから入ってはいけない」という偏った考えを生み、子ども達をどんどん川から遠ざけてしまうことになっています。子どもたちは川に入ると、「自分で魚が捕れる」という成果に喜びます。そして、もっと川や魚を知りたい・学びたいという意欲が沸いてきます。親子で川に親しむ活動や小学校での総合的な学習に「川」という本来身近にあるレクリエーションの場を活用しない手はないと思います。

人と天然記念物の結びつきを実証

河川財団奨励賞の受賞については、これまで未解明であったイタセンパラの基礎生態である生活史や繁殖生態を明らかにしただけではなく、その利用環境として、地域住民の稲作による水位変動が重要であることを明らかにした点を評価されたのではないかと思っています。

イタセンパラの基礎生態を明らかにするために、1，285個体のイタセンパラの体長を分析したところ、①イタセンパラは3ケ月で急成長（6月に体長約1㎝から9月に体長約6㎝に成長）し、9月に成長が止まり産卵すること。②産卵後には、親魚が確認されないため、寿命は1年程度であること。③産卵場所として、「二枚貝の豊富さ」、「25㎝から33㎝の水深」および「土手のヨシなどの雑草」が重要であること。の3点を提示しました。特に、水田用水路として利用されている万尾川において、灌漑期から非灌漑期の水位低下に伴って形成される浅場（25～33㎝の水深）が、イタセンパラの産卵期（9～10月）における大型肉食魚やサギ類からの捕食者回避を可能にしていることはイタセンパラを保全する上での貴重な知見となりました。このように水田の水管理がイタセンパラに好適な環境であることを明らかにしたことは、人と天然記念物の結びつきを実証したことになると思います。これらの一連の成果は、イタセンパラの重要な新知見として、Journal of Fish Biology（イギリス水産学会誌）に掲載されました。

子どもたちの川離れの改善に

河川基金は研究者・川づくり団体・学校と3部門に分けて幅広く助成しており、各分野の方々にとって応募しやすくなっていると思います。研究者は科研費や民間助成金等を、そして川に関わる団体は河川基金や他の助成機関による助成金を必死で探しますが、意外と学校や幼稚園・保育園は使える予算が少ないにも関わらず、このような民間助成金を探しません。これは、各学校や幼稚園・保育園を対象とした助成制度が十分に周知されていないことと、川で行う体験活動や教育として「何をすれば良いのか分からない」ことが原因だと思います。近年、全国各地にある水族館では「出前講座」「出張水族館」など、専門の学芸員を小学校や幼稚園・保育園に出張させ、園児と川・水・魚に触れ合う機会を提供しています。このような活動にも幅広く助成することで、子どもの川離れの改善に一役買うのではないかと思います。私もイタセンパラ研究展示施設である「ひみラボ水族館」の管理運営を通して、小学校や地域の方々や民間団体の方と河川教育を実施しています。子ども達が川で学ぶべきことは多く、この活動が広がっていくことで川への興味や関心は増していくものと思われます。

異分野の視点からのアドバイス

過去の助成者をみると、大学の教授や研究機関の方々がほとんどでしたが、若手枠なら、もしかすると採択されるかもしれないと思いエントリーしました。応募書類もそれほど多くないので、助成経験のない方は、一度応募してみると良いと思います。このような助成金申請をすることは、自身の研究を対外的にア

河川財団奨励賞受賞研究

- イタセンパラを郷土の宝として次世代へ -

ピールする場としても役に立ちます。また、申請書をどのように書けば、審査員に自身の研究の重要性をアピールできるかということを学習する場にもなります。できあがった申請書はすぐに申請することなく、2～3日後に読み直すことや、自身の研究を全く知らない友人や異分野の研究者に読んでもらうことを強くお勧めします。違った視点からのアドバイスは助成金獲得への近道だと思います。

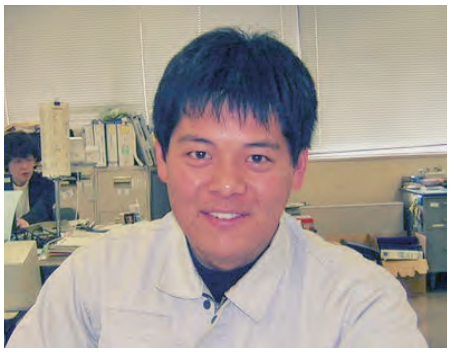
郷土の宝として次世代へ

これまでの研究で、イタセンパラの生活史の解明や、好適環境を維持する要因が「水田およびその管理」であることを科学的に証明できました。今後は、得られた成果を地域に還元することが大切だと考えています。例えば、イタセンパラを河川で維持していくためには、万尾川周辺での稲作を継続してもらう必要があります。そのため、万尾地区で収穫される米を「万尾イタセンパラ米」で商標登録してもらいました。収穫される米を地域ブランドとして登録することで、稲作の安定した継続にも繋がります。万尾イタセンパラ米の販路拡大などを視野に入れながら、イタセンパラと稲作という人間活動が共存していける体制を構築していく必要があると考えています。また、これまで研究者が主体で実施しているイタセンパラ調査を、市民参加の活動にシフトしていくことも重要です。市民のイタセンパラ保護意識を向上させるために、環境保護の担い手である子どもやその親に「イタセンパラ守り人」として登録してもらう制度を設けています。これらの多角的な活動を通して、イタセンパラを貴重な「郷土の宝」として次世代に引き継ぐための活動を継続したいと考えています。

今後の抱負

本研究から明らかとなった、水田の水管理がイタセンパラの好適環境を醸成しているという点は、二次的自然における人と生物の結びつきの重要性を実証するものであり、まさに天然記念物の指定目的に合致したものであるといえます。今回明らかになった成果は、日本の農業として最も一般的な「稲作」が河川生物を保護するという貴重な情報を提示しています。今後の目標として、河川基金で助成いただいた3か年の成果を新たに科学論文としてまとめ、その成果を広く社会に公表することが重要だと考えています。

最後に、本研究に助成いただいた河川財団の皆様に心より感謝いたします。表彰された研究成果は、大学院の恩師である山崎裕治先生、文化庁記念物課の江戸謙顕先生、共同研究者の川上僚介さん、川本朋慶さんと一緒に作り上げたものであり、この場をお借りして深く御礼申し上げます。来年度は、「研究者」部門ではなく、「川づくり団体」部門で、河川と子どもをつなぐ活動に応募したいと思っています。



西尾 正輝　Masaki　NISHIO

富山県氷見市教育委員会　主任学芸員。博士（理学）

1980年大阪府高槻市生まれ。2003年3月近畿大学農学部水産学科卒業。2003年5月氷見市教育委員会嘱託職員。2005年4月より氷見市教育委員会学芸員。2016年富山大学大学院理工学教育部博士後期課程修了
2004年とやま環境賞優秀活動賞。2009年日本水大賞奨励賞。
主な著書・論文に「絶体絶命の淡水魚イタセンパラ　希少種と川の再生に向けて」（共著　東海大学出版会　2011）、「富山県氷見市万尾川に生息するイタセンパラの出現パタンと産卵場所」（責任著者　魚類学雑誌　2012）

「株式会社あらた」様が、河川財団と連携したキャンペーンを実施！

実店舗でのキャンペーン実施状況例

化粧品、日用品、家庭用品などの卸売を手がける生活用品商社の「株式会社あらた」様（東証一部上場）は、この夏、河川財団と連携して、節水や排水配慮などの効果のある商品の販売促進キャンペーンを実施しました。（2016 年 6 月 1 日～ 9 月 10 日まで）

このキャンペーンは、環境省が官民で推進する「Water Style」の一環として実施されています。全国約 1,000 箇所のドラッグストア、ホームセンター、スーパーマーケットなどで、キャンペーン対象商品を含む 500 円以上の金額の買い物をしたお客様が、備え付けの応募ハガキにレシートを添付して応募すると、応募レシート総額の 1％を当財団が運営する「河川基金」に寄附される仕組みとなっています。また、抽選で 1,000 名様に、「株式会社あらた」様から 500 円分のクオカードがプレゼントされます。

株式会社あらた様、全国のキャンペーン協力店様、そしてご応募をして頂いたお客様に心から感謝申し上げます。頂いた寄附金については河川基金に繰り入れ、よりよい「川づくり」に寄与する活動に有効に活用させていただきます。

今回は、河川財団が民間企業の CSR/CSV（企業の社会的責任 / 共通価値の創造）活動と連携して、河川基金の充実に取り組む初めてのケースです。今後も引き続き、民間企業を含む様々な方々との連携を図ってまいります。

店舗でのキャンペーンポスター

Water Style

Water Style（平成 27 年度～）
https://water-project.env.go.jp/waterstyle/

- 環境省が官民連携で推進するウォータープロジェクトの一環。
- 水を「～守り育て、贈り使い、大切に還す～」をキーワードに、水循環を官民が連携して支えていくことを「JAPAN Water Style」として民間企業や地方公共団体を含めて国民へ広く提案。
- 民間企業等では、それぞれの水に関する商品やサービス、取組などを通じて、水との向き合い方「Water Style」を PR。
- これまでにファミリーマートやサントリー、コカ・コーラ、TOTO、メタウォーター、クボタ、鴨川シーワールド等が参画。

INFO

河川基金 推進事業

人づくり活動を
支援する基盤整備

水難事故防止

ライジャケ・オン！

キャンペーン
（全国一斉川の流れ体験）

川の流れ体験イベント in 多摩川

実施日：
平成 28 年 7 月 31 日（日）13 時～ 15 時
実施場所：
狛江水辺の楽校（東京都狛江市）
主催：
（公財）河川財団、NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会（RAC）
参加費：
無料
協力：
狛江市、狛江水辺の楽校、東京学芸大学・東京川ガール、スターバックス コーヒー ジャパン 株式会社、ミズベリング、クリアウォーター・カヤックス

毎年繰り返される川での水難事故。水難事故を防ぐにはライフジャケットを着用することが最も効率的かつ効果的です。
そのため河川財団と NPO 法人川に学ぶ体験活動協議会等では、ライフジャケット着用を呼びかける様々な取組を行っています。
子どもたちを水の事故から守る『ライフジャケットの普及と着用に向けたキャンペーン（ライジャケ・オン！キャンペーン）』のメインイベントとして、多摩川で川の流れ体験イベントを行いました。

川の流れ体験イベント in 多摩川　REPORT

昨年度は前日の降雨により川の水が増水したため中止となりましたが、今年は小雨が降る等の天候でスタートしました。水難事故防止ライジャケ・オン公式キャラクターの「山田るま」さんの力強い「ライジャケ・オン！宣言」で始まった開会式。すると時折小雨が止む等、段々と雨雲から太陽が垣間見えるようになりました。

開会式で「ライジャケ・オン！宣言」

様々なライフジャケットを展示し、お気に入りのライフジャケットを着用してもらって記念撮影をするコーナーや、多摩川で採れた生き物を水槽に展示する東京学芸大学・東京川ガールのコーナー、店舗の地域活動としてこのイベントに賛同し参加いただいたスターバックス コーヒー ジャパンからアイスコーヒーを無料提供いただくコーナーなどのブースが設置され、参加された方々は様々な企画を楽しみました。

スターバックス コーヒー
稲城東長沼店の皆様
による「川カフェ」

そして川の流れ体験では、ライフジャケットを着用した親子がはじめてとなる川の流れに身を任せ、浮く感覚や見た目以上に力強い川の流れを肌で感じていました。また、E ボートと呼ばれる大型のゴムボートに乗り込み、みんなで力を合わせて漕ぎ、最後は多摩川に向かってジャンプ！ワクワクする冒険に子どもも大人も溢れんばかりの笑顔でした。

多摩川には生きものが
たくさん！

あっという間の２時間が終わり、参加者や我々スタッフにおいても笑顔の絶えない夏の１ページとなりました。これからも、川に近づく際には是非「ライジャケ・オン！」して楽しい思い出を作っていただきたいと思います。

大人も子どもも川の流れを体験

10 人乗りの E ボート体験

東京学芸大学・東京川ガールによる川の生物展示

生き物探し

ご寄附の御礼

寄附者の皆様へ

平成 27 年 9 月 1 日から平成 28 年 8 月 31 日までの一年間に、「一般財団法人　宮崎大淀川スポーツセンター」や「釧路リバープロテクション 21 の会」をはじめとする、団体や個人の皆様から 2,909,167 円のご寄附をいただきました。寄附者の皆様に心より御礼申し上げます。

ご厚志につきましては、河川基金として管理し、その運用益を河川の治水・利水・環境に関する調査、川づくり団体の活動や学校での河川教育を支援する助成事業のために有効に使わせていただく所存でございます。

公益財団法人　河川財団
理事長　関　克己

寄附金の税法上の優遇措置について

当財団は、内閣総理大臣より「公益財団法人」としての認定を受けております（認定日は平成 25 年 3 月 21 日、法人登記日は同年 4 月 1 日）ので、当財団への寄附金には上記の河川基金への寄附金及び一般寄附金のいずれについても特定公益増進法人としての税法上の優遇措置が適用され、所得税（個人）・法人税（法人）の所得控除等が受けられます。

詳細は河川財団 HP をご覧下さい。

河川財団　検索

「河川基金」とは

昭和 63 年に河川財団（河川環境管理財団）に「河川整備基金」として設立。設立後 30 年近くを経過し、社会情勢の変化等に対応するため「河川基金」として新たなスタートを切っています。

国民・企業等 → 寄付 → 河川基金 → 運用益 → 助成事業 / 推進事業 → 成果 → 全国の川づくり活動の広がり

- 助成事業
  - 研究者・研究機関部門
  - 川づくり団体部門
  - 学校部門
- 推進事業
  - 政策研究・人づくり活動を支援する基盤整備

数字で見る「河川基金」

助成件数（昭和 63 年度～平成 28 年度）　約 **10,110** 件

助成総額（昭和 63 年度～平成 28 年度）　約 **115** 億円

河川財団は、我が国の助成財団の中で、助成等事業費で 38 位にランキングされています。

（「日本の助成財団の現状」より助成財団センター調べ　H25 年度）

助成等事業費

38 位

河川基金

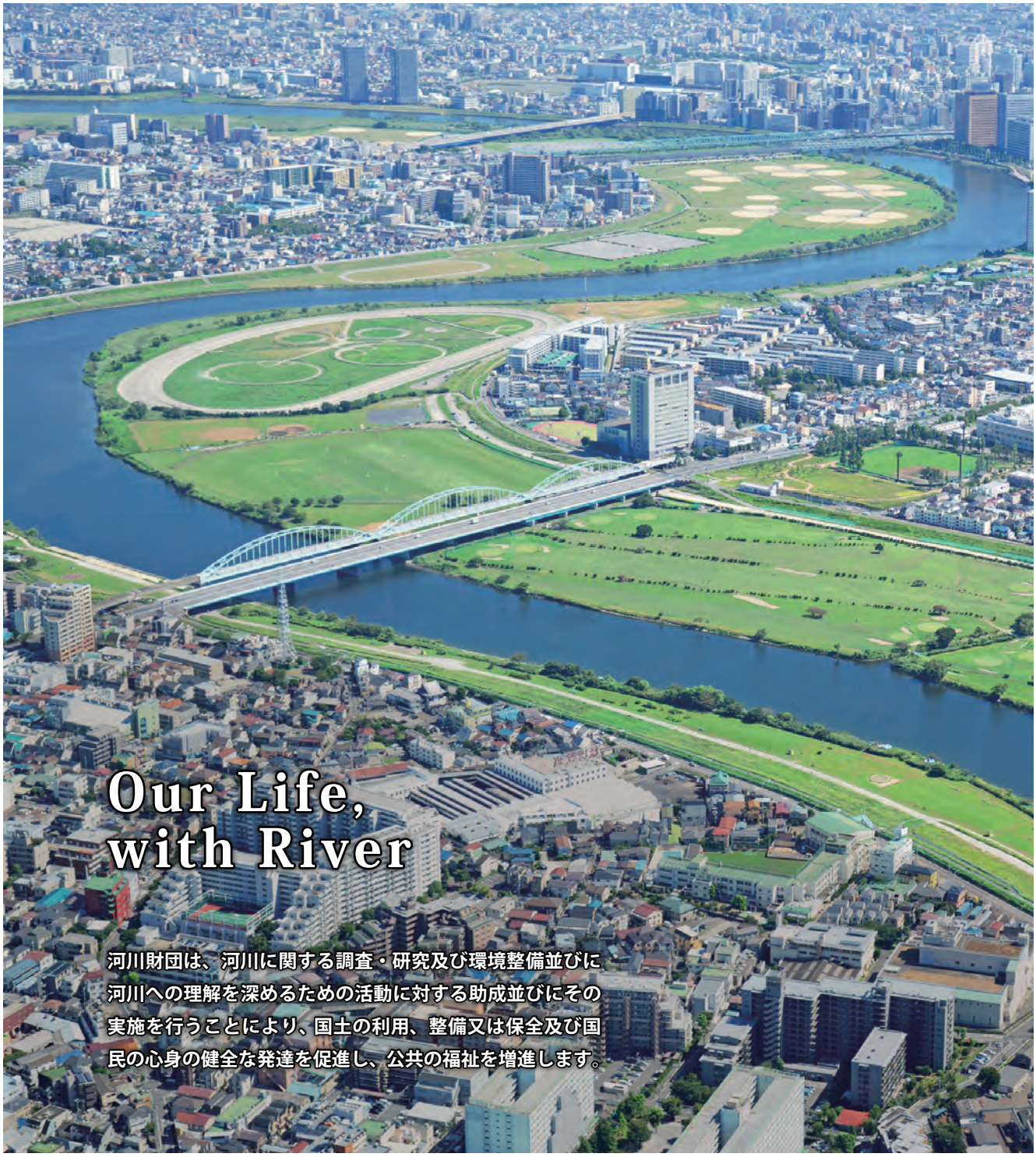
INFO

河川基金ウェブサイトをリニューアルしました。

平成 29 年度河川基金の募集開始に合わせ、より見やすく、必要な情報へよりアクセスしやすくなるよう河川基金ウェブサイトをリニューアルしました。（平成 28 年 10 月より）

www.kasen.or.jp/kikin/

RIVER FUND
河川基金だより
平成 28 年 10 月発行
Vol. 35
2016 October



●編集発行：公益財団法人　河川財団　基金事業部
本誌はホームページでもご覧になれます。http://www.kasen.or.jp

公益財団法人
河川財団

本部
〒 103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町 11-9 住友生命日本橋小伝馬町ビル（2F）
http://www.kasen.or.jp　　E-mail:info@kasen.or.jp

本部

総務部	TEL:03-5847-8301	FAX:03-5847-8308
経営企画部	TEL:03-5847-8302	FAX:03-5847-8308
基金事業部	TEL:03-5847-8303	FAX:03-5847-8309
子どもの水辺サポートセンター	TEL:03-5847-8307	FAX:03-5847-8314
河川総合研究所（戦略的維持管理研究所）	TEL:03-5847-8304	FAX:03-5847-8310
東京事務所	TEL:03-5847-8306	FAX:03-5847-8310

名古屋事務所
〒 463-0068 名古屋市守山区瀬古 3 丁目 710 番地
TEL052-388-7891　　FAX052-388-7918
E-mail:info-n@nagoya.kasen.or.jp

近畿事務所
〒 540-6591 大阪市中央区大手前 1-7-31（OMM13F）
TEL06-6942-2310　　FAX06-6942-2118
E-mail:info-o@osaka.kasen.or.jp